

震災後の院内

清宮 晴美

1000年に一度とも言われる巨大地震。経験をした誰もが恐怖と不安を感じたことと思います。

私の勤務地である水戸市では、「震度6」今までに経験したことのない激しい揺れに襲われました。すぐに収まるだろうと思っていた揺れは、だんだん強くなり、なかなか収まらないなかで恐怖と不安だった気持は今でも鮮明に憶えています。揺れが収まった頃には、机上や棚の書類は散乱し、書類棚も転倒してしまっただけの状態でした(図1)。



図1 事務所内の様子

自宅や家族の状況が気になりながらも、外来・入院患者様の状況確認のため真っ先に病棟へ向かい、病棟スタッフと共に各病室を回

り患者様の安全確認をしました。その最中も大きな余震が何度もあり、その度に恐怖と不安で皆が声をあげていたのを憶えています。

病棟や病室内では足の踏み場もないくらい物が散乱し、スプリンクラーの作動により水浸しの病棟もあり、一時大きな混乱となりました。

病院図書室や旧看護学校に保管してある書籍、製本雑誌も、すべて棚から落下し、棚も歪んでしまった状態でした。片づけに追われるなかでも医師からは文献の依頼が多くあり、震災直後から、日本医学図書館協会の皆様や全国の日赤図書室の皆様には「災害無償支援文献」として、たくさんご提供いただき、本当にありがとうございました(図2)。



図2 図書室内の様子

当院は、茨城県の基幹災害医療センターに指定されており、震災直後から職員全員が一丸となり対応しました。外来では、正面玄関

SEIMIYA Harumi

水戸赤十字病院 図書室

前エントランスホールに臨時の救急受付が設置され、昼夜交替で救急対応を行い、病棟では、震災により入院設備が機能しなくなってしまった近隣の病院から、当院へ搬送となった患者様の対応と、発災から多くの患者様を受け入れました。

救護班についても、震災1週間後から県内の避難所へ、4月からは本格的に東北各県に救護班や病院支援要員が派遣されました。

私の住む地域でも、自宅の東側一面、海が見える場所にあり、幸い高台であったため津

波の被害は避けられましたが、数キロ離れた低地にある介護施設や民家、町役場では、津波が押し寄せ、被害を受けました。地域住民は、近くの小中学校に避難していましたが、そこでも他日赤の救護班が訪問していただき、皆感謝しておりました。

最後に、今回の震災に伴い、文献支援をはじめ多方面から多くのご支援をいただきましたこと、深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



図3 救急対応の様子